

“もったいない”を暮らしのキーワードに

国立環境研究所を含む9カ国の国際研究チームが解析したところによると、北極圏の上空で3～4月、観測史上最大のオゾン破壊が発生し、初めて南極のオゾンホールに匹敵する規模に進行したことが分かったというニュースが、10月3日付の一般紙に流されました。国際研によると、3月末には、北極圏上空18～20キロの成層圏にある空気塊で、通常のオゾン量の80%が破壊された。その範囲は長軸が約3千キロ、短軸が約千キロの楕円形で、スカンジナビア半島などをすっぽり覆いました。今年は北極圏上空の成層圏に、過去30年間で最強の低気圧性の渦“極渦”が発生して、暖気の流入を拒み、氷点下80度以下の低温状態が長期に亘って続いたことが原因だとしています。

国環研は今回の破壊につながった極渦の強さについて「温室効果ガスの影響も考えられる」と話しています。従来より、南極のオゾンホールの拡大が問題になっていますが、北極もこのような状態になってきたことは、年々人類が住めない地球になっていっていることを示しているのではないのでしょうか。私たちが呼吸する空気は年々汚れが加速していますし、飲み水、食物も同様で安心して

飲食できない状態にどんどん進んでいるのではないのでしょうか。開発と言う名の下に破壊がどんどん進んでいる結果だと思えます。

「MOTTAINAI」の言葉を世界に広めて環境保護活動と民主化運動に取り組んだ功績でノーベル平和賞を受賞されたケニアのワンガリ・マータイさんは、先日逝去されましたが生前「干ばつはマン・メード・ディaster（人災）」だと熱帯林の乱伐を止め植林をして本来の地球環境を取り戻すことの重要性を、アフリカの人たちをはじめ世界のオピニオンリーダーや人々に訴えられました。3.11の原発事故で今年の夏は節電に国を挙げて取り組みましたが、確かにやり過ぎのケースもありましたが、国民の多くがいかに漫然と資源を浪費していたかということに気づかされたのではないのでしょうか。ハイブリッド車とか電気自動車への移行で化石燃料の消費は減っているのでしょうか、まだまだ化石燃料を消費する車の使い方をしていないのでしょうか。半世紀前の暮らしに戻れとはいいいませんが、常に“もったいない”暮らし方をしていないかチェックする習慣を身に付けて持続可能な環境社会の実現をめざそうではありませんか。

部落差別に結びつく差別の社会的成立

はじめに

差別には、女性差別、障害者差別など色々な差別がありそれぞれに特徴があります。ただし、いずれの差別も本人の責任でないことを理由にして不利益な取り扱いをされることは共通です。部落差別の特徴と言えば、生まれとか、門地とか、家柄とか、血統とか、出身によって不利益を被ること、不平等に扱われることです。すなわち、建国以来の社会的・政治的仕組みの流れにおいて、「家柄」とか「血統」という生まれというものを「身分」として捉えてきたので、部落差別の源を探るうえで、この「身分」が大変重要なキープポイントになるのです。

今回は、「身分制度」の歴史で一つの区切りとなる「古代身分制」の成立過程とその実態や特徴について考察してみることとします。

1 身分の成立過程

この日本列島社会に今から2000年前に既に「身分」というものが存在していたことが、歴史書で明らかになっています。『後漢書』東夷伝によると、国王と大夫と生口がいたと書かれています。「生口」というのは奴隸が通説になっており、『後漢書』に倭国王から後漢王に生口160人を献上したとあり、人間が土産物扱いにされていたことが伺えます。なお、弥生時代後期には「奴婢」という奴隸階層がいたことがわかっています。奴婢は法律上「資材と同じ」とされ、官主の意のままに売買、贈与、人質あるいは相続されていたことから、一般良人と同等の人格者とは認められない存在であったことが分かっています。日本の歴史にはこのような「奴隸的」賤民

とは別に、共同体の問題、分業・職業の問題、階級の問題、さらに宗教などの観念の問題、特にケガレの問題からうみだされた「排除」に基づく「被差別部落」賤民（穢多、「非人」、「隠亡」など）があり、そこに政治・権力の問題が絡んで、身分制度ができあがっていったことを念頭において部落の歴史を学習する必要があります。

2 古代身分制の実態と特徴

(1) 律令国家と身分制

奈良時代に我が国は、中国の隋・唐の制度を模倣した律令国家になり、身分制度は次のように整備されました。天皇—貴族—公民—品部—種戸—五色の賤。被差別民の「賤」は、さらに護戸—官戸—家人—公奴婢—私奴婢の5階級に分けられます。この中で私奴婢が最も過酷な境遇に置かれ、生殺与奪の権利は、私奴婢を所有している貴族層が握っていました。

(2) 古代身分制の実態と特徴

次に古代身分制の特徴は、貴賤観念であり中国の隋・唐から導入した律令制度に反映されていました。貴賤観念とはどのようなものかという、すべての人間を一応人間とみて人間を価値の多い人と価値の少ない人とに分ける考え方をいいます。それに対してケガレ観念は、インドのヒンドゥー教に濃厚に見られる考え方で人間を同じ人間と見ないのです。ケガレている人間とケガレていない人間に分けてケガレている人間は、もう人間ではないとする考え方です。この考え方は、仏教の伝来につれて我国に入ってきたと思われている方がいるかも知れませんが、実は

日本列島社会にもその萌芽が存在していました。どこに見られるかという点、「賤民」で一番上とされた「賤戸」です。天皇とか皇后あるいは皇太子等のお墓を守護する人が「賤戸」です。やはり死体に関わりますので、死体に関わるケガレが反映される「賤民」とみられていたのです。

(3) 平安時代のケガレ観念と排除

我国の仏教は、平安時代に空海・最澄が中国に留学し我国に伝えたこととされていますが、サンスクリット語で書かれた原始仏典で釈迦本来の教えをストレートに学び我国に持ち込んだのではなくてヒンドゥー教の影響をかなり受けている仏典によりいわゆる大乘仏教を持ち込んだのです。

例えば、天台宗とか日蓮宗が重視する大乘仏教の根本仏典の「妙法蓮華経」（「法華経」）には、「(菩薩・摩訶薩は) 鹿野園及び猪・羊・鶏・狗を畜い、敗氣し漁捕する諸々の悪律儀のものに親近せざれ」と書かれています。菩薩・摩訶薩とは、修行している高僧、立派なお坊さんのことですが、「そういう人たちは、身分の低い旃陀羅とか、家畜業とか漁師、猟師など『悪律儀の者』と親しく接してはいけない」と説かれているのです。これはほんの冰山の一角で大乘仏典の中には差別的な記述が数多く見られます。この考えがだんだん平安中期・末期、鎌倉時代に入るにつれて、お坊さんの説法を通じて民衆に降りてくるようになりました。説法を聞いた民衆は「こういう人たちに近づいてはいけないんだな」と考えざるを得ないことになり、低い身分の人々とか、食肉業・皮革業の従事者とかが、次第に社会から排除されていくことになりました。

(4) 延喜式の影響

大乘仏教の差別的な考え方や日本固有のケガレの考え方があり、平安時代に権力者が法律化し、強化していきました。

延長5年(927年)に制定された法律「延喜式」を見ますと「凡触穢惡事忌忌」(およそケガレ忌むべきことに接したならば、次のように忌まなければならない)とあります。『人死限三十日』と人の死体は最も強いケガレとされ、後には50日に延ばされました。これが今の日本社会に残っており、香典返しは、ケガレの明けた49日が過ぎてからとなっているのです。

部落差別につながるものとして「六畜死五日」というのがあります。六畜とは、牛・馬・羊・鶏・猪・犬を言います。この六畜の死体が5日のケガレとされています。部落産業とされた屠畜業、食肉業、皮革業に従事する者は年がら年中触れる仕事をしているので年中ケガレしているとされ、法律的に職業差別が始まることになってしまったのです。

そのほか延喜式には、たくさんの規定があります。例えば、動物の出産について六畜の出産は3日のケガレとあります。しかし、「鶏非忌限」(鶏は忌む限りにあらず)と書いてあります。雌鶏が卵を産む度にケガレるとなると、困ることになるので例外規定を設けているのです。いかに権力者の都合によって規定されていたかということがよくわかる事例です。

延喜式の別の条項では、「鴨御祖社」(今の下鴨神社)の南辺りは、境内の外側になりますが「濫僧・屠者など居住するを得ず」と規定しています。天皇家の守護神の神社の清浄を保つために、濫僧(非人法師)、屠者(食肉業者)、は住んではならないとしたのです。こうして排除の差別が始まったのです。(以下、次号に続く。)

◇ ◇ ◇
今回は、部落差別に結びつく差別の始まりから次第に固定されていく過程について学ぶことにします。

お知らせ

海蔵地区人権・同和教育推進協議会

発足20周年記念

「人権を考える集い」開く

10月8日(土) 海蔵小学校体育館



本年度は、海蔵地区人権・同和教育推進協議会が発足して20年目の節目の年にあたりますので、記念の意味をこめて尼僧として多くの人々を導いてこられた青山俊董先生を講師にお迎えして、「生命の尊さに目覚める」と題して講演していただきました。今回は、地区内外から約140名の方に参加していただき、熱心に聴講していただきました。

お話は、私たち一人ひとりが生命の大切さに目覚め、いかに生きるかを考えるために、実例をあげてわかりやすくお話していただき、多くのヒントを与えてくださいました。(事業部)

<講演の概要については、次号で>

オゾンについて

今から約35億年前、この地球の海の中に生物が誕生し、光合成により二酸化炭素を酸素に変える働きをもつラン藻類が登場し、地上に酸素を供給し始め、大気中の酸素濃度が高まり、成層圏にまで達するようになって、成層圏の強い紫外線によってオゾン(O₃)が作られるようになりました。そのオゾンが地上約10~50kmのところに高密度で存在します。これをオゾン層といいます。オゾン層は紫外線を吸収して、地上の生命を守っています。

地球の生命が極めて長い期間を費やして作り上げたオゾン層を、地球の一生命である人類が、もともと自然界に存在しないフロンという合成物質によりこのオゾン層を破壊しているのがオゾン層破壊問題です。

南極圏の成層圏にあるオゾンが破壊される現象に、南半球の春季(9~11月)に、南極圏の高度10~25kmの成層圏オゾン層の量が、南極大陸がすっぽり入ってしまうくらい穴状の空洞で、これを「オゾンホール」といいます。

北極にも同様の現象が発生しますが1980年代以前は大規模なオゾン層破壊は観測されませんでした。90年代に入ると環境悪化が進み「北極オゾンホール」といえるほどになってきました。今年4月22日AFP通信は、米コロンビア大学の研究チームが21日、過去50年間のオゾン層と気象データを分析した結果南極上空のオゾン層が気候変動の重要な要因となつて、南半球で降雨を増加させていたとする論文を米科学誌「サイエンス」に発表したことを報じました。北極圏でも同様な現象が起きる可能性があり、北極での氷床溶解や温室効果ガスの問題と同様にオゾン層の問題も考慮する必要があることを訴えている。今年の集中型降雨現象の多発などその兆しではないかと思わざるを得ず、真剣になって代替フロンガスや温室効果ガスの排出を抑制する必要があるのではないのでしょうか。